

# 省察的実践の実践モデル構築に関する一考察 —ソーシャルワーク実践の構成要素からの検討—

加藤由衣<sup>1</sup>

(2018年9月26日受付, 2018年12月17日受理)

A Consideration on the Construction of a Practice Model for Reflective Practice:  
An Examination from the Components of Social Work Practice

Yui KATO<sup>1</sup>

(Received : September 26, 2018, Accepted : December 17, 2018)

## 要 旨

省察的実践は、ソーシャルワーク実践においてその重要性が認められている一方で、理論の曖昧さや理論化の困難さが指摘されている。このような状況のなかで本稿は、省察的実践の実践モデルの構築を目指し、理論の特徴を整理することを目的とした。具体的には、ソーシャルワーク実践の4大構成要素に着目し、それらが実践で機能するうえで、省察的実践がいかに影響するのかを検討した。そして、各構成要素に対する省察的実践の特徴を提示するとともに、それらの関係性を示した。また、ソーシャルワークにおいて、①理論と実践を統合し、②過去・現在・未来を包括するプロセスとして、実践モデル構築に向けた試案図を作成した。

キーワード：省察的実践，実践モデル，形式知，実践知，批判的省察

## Abstract

While the importance of reflective practice has been recognized in the context of social work practice, it has been pointed to the ambiguity of its theory and the difficulty of its theorization. Given these circumstances, in this paper I seek to construct a practice model for reflective practice with the goal of organizing the characteristics of theory. For that reason, this paper focuses on the four components of social work to examine how these influence reflective practice to function in practice. Then, I demonstrate the characteristics of reflective practice for each components while also describing their relationships. In addition, I have prepared a tentative schema for a practice model as a process that (1) integrates theory and practice and (2) encompasses past, present and future.

Key Words : reflective practice, practice model, explicit knowledge, practical knowledge, critical reflection

<sup>1</sup> 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・助教・博士（福祉社会学） Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Teaching Associate (Ph. D.)

## I. はじめに

省察的实践は、Schön が、行為をしながら省察する実践家の特徴に着目し、「行為のなかの省察 (reflection-in-action)」という考え方と省察的实践家という新たな専門職モデルを提唱したことが始まりである。この専門職モデルでは、実践家が、理論を実践に機械的に当てはめるのではなく、不確実性に富んだ状況のなかで、状況を見極め、状況に適した行為を行っていることが示された。同時に Schön は、実践の後にふり返りを行う「行為についての省察」の重要性を指摘したのである。それ以来、省察的实践はソーシャルワークを含む対人支援専門職で注目されてきた。

わが国のソーシャルワークにおいては、実習教育などでふり返りや内省が重視されるが、省察的实践に関しては、まだ十分浸透していない印象を受ける。また、研究に関しても、省察や省察的实践の重要性を指摘するもの (平塚2009; 空閑2012) や、省察などの概念整理 (隅広2010; 日和2015)、省察学習の研究 (南2007) がみられるが、省察的实践の方法や内容を探究するものは、ほとんどみられない。一方、イギリスなどの諸外国では、省察的实践が効果的な実践に求められる専門職像として受け入れられ、広く研究も行われている (Ruch2005; Knott ら 2013; Pawar ら 2015; Thompson ら 2018)。また、省察的实践を促進する記録やスーパービジョンの研究もみられる (Bolton2014)。

しかしながら、多数の研究がなされているにも関わらず、省察的实践そのものが不明確であるという根源的問題が存在するのも事実である。そのため、省察的实践が何によって成り立ち、いかに実践で具体化されるのかという命題に対して、まだ十分な答えが見当たらないのが現状といえる。

そこで本稿では、省察的实践の方法を探究するための基礎研究として、省察的实践の理論の特徴を整理していきたい。それにより、ソーシャルワーク実践における省察的实践の実践モデル構築への足がかりとしたい。

## II. 省察的实践研究の課題

### 1. 省察的实践の意味

省察の概念自体は決して新しいものではなく、Dewey (1916) の研究の貢献があげられている (南2007; Bruce2013; Pawar2015)。具体的には、「ある未確定な状況に巻き込まれて混乱した状況下における何らかの経験をし、そこで何が起きているのかを探索・分析し、問題は何かを明確化し、それを解決するための仮説を立て、実際に行動することによって仮説を検証する」(南2007: 5) という省察的思考のプロセスが、Dewey によって示された。このように Dewey は、教育における経験の意義に着目し、経験に対する意味づけや、次の行動へと導く仮説とその実行・検証という一連の活動として省察を提唱したのである。

そして、省察的实践が広く認知されたきっかけは、Schön (1983) が、近代科学を基盤とした技術的合理性の専門職モデルに対する新たな専門職モデルとして示したことにある。具体的に Schön は、技術的合理性の2つの問題点を提示した。まず1つ目は、技術的合理性が、問題を技術的に解決することを強調するばかりで、問題解決に必要な問題の設定を無視している点である。つまりこのモデルでは、すでに規定された問題の解決策を模索するのが専門職と捉えるため、現実世界のなかから問題を明確にするという実践者の行為が抜け落ちている。しかし実際の実践者は、不確かな状況のなかから注意を向ける事柄を見極め、何が問題かを認識することで、はじめて解決に向けて進んでいく。Schön は、技術的合理性がこの点を見落としているところに大きな問題があると批判したのである。

また、Schön が指摘するもう1つの問題は、技術的合理性モデルが厳密性と適切性の間でジレンマを抱えるという点である。彼によるとこのモデルでは、専門的知識の厳密性を強調するゆえ、そのカテゴリーに当てはまらない事柄を意図的に避ける傾向がみられる。このことは、専門職が自分の専門的知識の範疇に一方的に利用者やその生活

を当てはめたり、それに当てはまらないものは除外したりすることにつながると考えられる。そしてそれは、生活そのものを捉えるというソーシャルワークの発想とは、明らかに逆行するものである。

こうして Schön は、近代科学の技術的合理性モデルが有する問題から、それに替わる省察的实践家という新たな専門職モデルを示した。そして彼は、「実践者が不確実性と不安定さ、固有性のある状況や、価値観の葛藤が生じている状況に適切に対応する際の『わざ (artistry)』の中心は、行為の中の省察というプロセス全体にある」(Schön1983: 50) として、省察することの重要性を説いた。また彼は、変化・変容する多様な生活状況に対応するソーシャルワーカーなどの専門職は、自身の実践活動をふり返ったり、実践を行いながら省察したりする実践的思考のスタイルにこそ専門性があると主張したのである。

このように、技術的合理性モデルが既存の理論や枠組みに当てはめて状況や問題を決めつけたり、理論を機械的に問題解決に適用したりすることに対し、省察的实践家モデルは、思考や行為のなかに含まれる省察に着目したのである。そして省察的实践家モデルは、多様な対人支援の専門職のなかで、新たな専門職モデルとして注目されるようになった。それはソーシャルワークにおいても同様で、これまで多様な研究が進められてきた。

## 2. 省察的实践研究が直面する問題

省察的实践は、多くの専門職の实践に影響を与えてきた一方で、理論の曖昧さの問題が指摘されている。たとえば Ixer (2016) は、実践者の行為や言動が、省察や思考の結果であるかどうか明らかでなく、省察できたと他者が測定できる方法をもたないことが省察的实践の問題であるとして、客観的に把握しづらい特徴を指摘した。また Wilson (2013) は、省察の定義や構造が曖昧であるゆえ、省察を促進したり抑制したりする要因や変数が明らかにされていないことをあげている。

同様に、省察的实践を構成する要素や省察的实践がどのように現実化されるかが不明確なことも、問題にあげられている (Ruch2002)。

このような問題から、省察的实践の理論的基盤は十分確立されておらず、ほとんど発達してこなかったともいわれる。その背景には、省察的实践がソーシャルワーカーという人に関わる理論であることが考えられる。つまり、省察的实践は、不確定な状況のなかで「わざ」を活かしながら実践する主体としてのソーシャルワーカーに着目しているのである。そしてその理論は、思考やソーシャルワーカーの内に存在する暗黙的要素を包含するのが特徴である。それゆえ、他のソーシャルワークの实践モデルやアプローチのように、他者と共有できる具体的な展開や行動を描きづらいのである。

こうした理論的特徴から、省察的实践の理論の土台となるものは、読んだり理解したりするのが困難であるとともに、理論化する我々の力に限界があり、理論化に対して十分な見通しがないともいわれている (Pawar2015: 42)。

こうしてみると、省察的实践は、ソーシャルワーク实践において重視される理論であるものの、抽象度の高さゆえに、实践モデルとなりえていないのが現状と理解できる。つまり、小山 (2016) が包括理論の特徴として説明するように、省察的实践は、「調査や实践によって実証されることは一般に難しいが、多くの人が納得することができる理論であり、实践においてはその目指すべき方向性を示したり、社会の大きな仕組みを理解させてくれるもの」(小山2016: 60) なのである。

対する实践モデルは、「援助方法の意義やその背後にある考え方 (实践理論) をわかりやすく説明しながら、そうした考え方に基づく具体的な援助の手続きを理解しやすく提示するもの」(芝野2002: 30) といわれる。以上のことから省察的实践は、Schön の研究に端を発する理論として広く浸透しているものの、それを实践場面に具体化できるような、手続き等を含めた实践モデルの提示

には至っていないと考えられる。

しかしながら、ソーシャルワーカーが省察的実践を理解し、実践へとつなげていくためには、実践モデルの探究が不可欠と考えている。そのため本稿では、理論化の困難さを理解しつつも、省察的実践の実践モデルを構築するための手がかりを模索していきたい。

### 3. ソーシャルワーク実践の構成要素からの検討

省察的実践の実践モデル構築の課題に対して、本稿では、ソーシャルワーク実践の構成要素に焦点を当てて、省察的実践の理論の特徴を整理することから始めていきたい。具体的には、ソーシャルワーク実践の各構成要素が実践で機能するうえで、省察的実践がどのように貢献するのかを、省察的実践に関する先行研究から整理していこうと考えている。

本稿でこのような研究アプローチを採用したのは、実践の構成要素が、ソーシャルワーク方法論の最大公約数の基盤として、ソーシャルワーカーが身につけ、体現することを求められるものだからである。加えて、ソーシャルワーク実践の研究では、「ソーシャルワーカーという主体の行為として具現される技（わざ）を含めた実践の構造化が必要」(平塚2009:17)といわれる。つまり、ソーシャルワーク実践の構成要素は、ソーシャルワーカーというフィルターをとおして実践で体現されるため、フィルターを含めた理論の研究が不可欠なのである。そして、このフィルターを通過する際に、省察的実践という理論が効力を発揮すると考えている。

このようにソーシャルワーカーは、ソーシャルワーク実践の構成要素に関する理解やスキルを身につけ、省察的実践をとおして実践に結実させていく。そのため、省察的実践の先行研究から、ソーシャルワーカーが、実践の構成要素に対していかなる姿勢で取り組み、実践活動に結びつける際に何が重要となるかを検討することが、実践モデルを構築する手がかりになると考えた。それが、暗

黙的な「わざ (artistry)」を含めた実践の構造化、すなわち省察的実践の理論の探究につながると考えている。

## Ⅲ. 省察的実践の理論特性の検討

### 1. ソーシャルワークにおける構成要素の考え方

ソーシャルワークでは、1958年に全米ソーシャルワーカー協会が「価値」「知識」「方法」という構成要素を提示して以来、一般的にこの3要素から成り立つと理解されている。しかし太田は、わが国の現状を鑑みながら、「知識」に関しては、「利用者自身のもつ固有で特殊な人と環境からなる状況を科学的に解析するための『状況知識』と、支援を目的にした社会福祉が制度や施策として保有する『方策知識』とに分別することが賢明」(太田ら1999:19)と指摘した。そして、ソーシャルワーク実践の4大構成要素を、価値・知識・方策・方法からまとめたのである。またこれらは、「Ⅰ価値を前提に、一方では人間の社会生活をめぐる専門的なⅡ知識と、他方では社会的な価値意識を反映した社会福祉の具体的施策としてのⅢ方策から、ソーシャルワーク実践のⅣ方法は成り立っている」(太田ら1999:20)とされ、そのシステム関係が示された。

本稿では、太田の提起した価値・知識・方策・方法という4大構成要素に基づき検討を進めていく。それは、制度や政策に具体化されるソーシャルワーク実践を取り巻くシステムへの視座(方策要素)が、省察的実践においても重要と考えたためである。そこで、検討に先立ち、4つの構成要素に関する検討の枠組みを説明しておきたい(図1参照)。

まず、ソーシャルワークにおける価値とは「感情や情緒に関連」するものであり、活動、態度、判断、比較を導くという抽象的な性質をもっている。ゆえに、価値は「個々のソーシャルワーカーの具体的活動としてあらわれる実践をまさに土台となつて下支えしている重要な構成要素」(太田ら1999:41)といわれている。この説明から、ソー



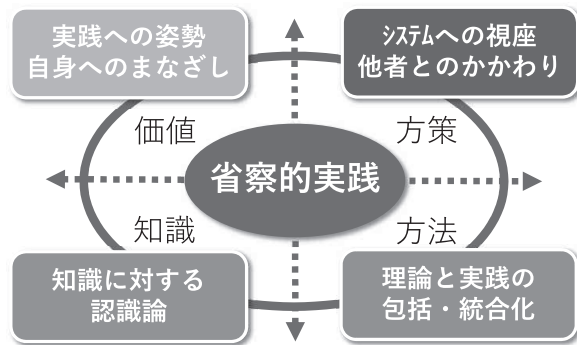


図1 省察的実践の理論に関する検討枠組み

ソーシャルワークの価値は、ソーシャルワーカーという人を介して実体として現れる基盤であり、ソーシャルワーカーという存在そのものが大きく影響すると考えられる。そのため、省察的実践の価値要素に関する検討を進めるうえでは、ソーシャルワーカー自身に着目することが重要になる。

また Johnson ら (2010) は、実践の価値・知識・技術を、感じること (feeling)、思考すること (thinking)、行動すること (action) のプロセスと対比させて説明した。そのなかで価値は、ある事柄について関心をもつこと (感じること) とされる。このことから、価値要素は、ソーシャルワーカーの感情や実践に対する関心の向け方、言い換えると姿勢やあり方に関連するものと考えられる。

次に、知識要素については、「社会生活をする人間の内面と外界との関係を視野に、隣接科学をも包摂した人間の社会生活の理解と、ソーシャルワーク実践を推進する科学的知識」(太田ら1999: 21) と説明されている。それは、エコシステム理論を基盤とした人と環境に関する知識や多様な実践アプローチの知識などで、実践を展開するために、ソーシャルワーカーが理解しておく必要のあるものである。こうした科学的な知識が重視される一方で、ソーシャルワークでは、異なる特性や基盤をもつ知識についても言及されている (岡本ら2016; Fook2016)。その背景には、ソーシャルワークのアートの側面や規範科学、社会構成主義の考え方がある。特に省察的実践は、多様な知識の存在を認めている点が特徴のため (Ruch2015)、

これらの知識にも着目する必要がある。こうしたことから、省察的実践の実践モデルの構築には、省察的実践における知識に対する認識論やアプローチを整理することが重要と考えた。

そして方策要素では、「施策の遂行と点検から施策の調整や計画さらに実践の評価をフィードバックして循環させサービスや施策を再整備する活動を意図している」(太田ら2017: 19)。また、方策要素に内包される特性概念として、「対策」[施策の動員・社会福祉サービスの開発]と「計画」[実践の推進と計画・参加と協働]があげられている。そのため、方策要素では、制度・政策などのシステムに対する姿勢、そして、参加と協働という実践を進めていくうえでの他者とのかかわりに対する視座の検討が必要と考えられる。

最後に方法要素に関しては、ソーシャルワークが理論と実践から成り立つ方法論であるため、これまで理論と実践の乖離という問題にむき合い、それを乗り越える試みがなされてきた。たとえば、支援ツールを活用することで、科学的知見による実践過程の可視化や、利用者との協働に向けた方法の具体化により、理論と実践の統合化が図られてきた (太田ら2017: 27)。そのなかで省察的実践は、ソーシャルワーカーという人を介して、理論と実践を結びつける方法と考えられる。そこで方法要素では、理論と実践を包括・統合していくうえで、省察的実践がいかに寄与するかを整理していきたい。

## 2. 価値・知識に関する省察的実践の理論の特徴

### (1) 価値

Thompson ら (2018) は、価値に関する省察について、専門職としての価値と個人の価値、そしてそれらが実践のなかでもつ意味や両者の葛藤を自らに問うことをあげている。ここからは、一方で、人権や社会正義、エンパワメントなど、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義や倫理綱領に示される専門職としての価値を深めることが重要とわかる。他方で、個人的な価値観やそれが実

践に与える影響を認識し、省察する必要性が理解できる。また、2つの価値観はソーシャルワーカーのなかに内包されるため、省察的实践では、ソーシャルワーカーという存在そのものへの着目が求められるのである。

ソーシャルワーカー自身に着目することに関して、近年の省察的实践の研究動向をみると、「思考 (thinking)」と「行為 (doing)」に加え、徳倫理学の観点からソーシャルワーカーの「存在 (being)」を重視するのはPawarら(2015)である。彼らは、価値や倫理に示される「なすべき行為」以上に、実践するソーシャルワーカーの徳や資質、特性に目を向けることを主張している。そして「存在」を、自己や社会の批判的な理解を育むことを視野に入れつつ、自己と他者について継続的に省察することで意識的に学ぶ、ソーシャルワーカーのダイナミックで発展的なトータルの状態と説明した(Pawarら2015:33)。

またBolton(2014)は、省察的实践の姿勢としてマインドフルネス(mindfulness)をあげている。マインドフルネスとは、生活体験から学習した価値や倫理が染み込んだ現在への気づきとまとめられ、その焦点は、いまこの瞬間の自身の行為に全面的に当てられる(Bolton2014:33-34)。

存在やマインドフルネスという概念をみていくと、さまざまな生活体験や実践経験、そこでの他者との関係から育まれた価値観を含んだ自らの特

性や性質、さらにそこから生み出される自身の行為を見つめるまなざしの重要性が理解できる。つまり省察的实践では、自分自身に対してオープンになり、性質や行為を含めた全体をありのままに受けとめ、認識していくことが求められている。

同様に、ソーシャルワーカー自身に焦点化する特徴として、自己中心性があげられる。Ruch(2002)は、省察的实践の3つの主要な特徴の一つに自己中心性をあげた。そして、自己とは、合理的で知的な理解と感情の自覚を認識し、統合したものであるとした。この自己中心性の考え方からは、ソーシャルワーカーの感情面を包含した自己への理解の意義がみえてくる。

このように省察的实践では、ソーシャルワーカーが自らの感情に向き合い、感情に関する省察を行う必要性がしばしば言及される(Knott2013; Bolton2014; Bassat2016)。それは、人間の脳が記憶と感情を分けて貯蔵できないため、人は過去の出来事を思い出すとき、同時にそのときの感情も思い出すからである(Bassat2016:66)。つまり、ソーシャルワーカーの経験に注目する省察的实践では、その経験に付随する感情という側面を切り離して考えることはできないのである。そのため省察的实践では、日々の実践のなかでの自身の感情に向き合うことが重要といえる。

さらに、Bolton(2014)がまとめた省察的实践の価値と原理(表1<sup>1)</sup>参照)は、省察的实践にお

表1 省察的实践の価値と原理

<u>自らの実践や省察のプロセスへの信頼 (trust)</u> この信頼は分析や疑問、探究、新たな試み、そして批判的であることを可能にする	
<u>信念や行為、感情、価値、アイデンティティに対する自尊心 (self-respect)</u> 自尊心とは、自身や他者と表現したり共有したりすることや、それをうまく実行するために不可欠なものをもっているという自覚である	
<u>すべての行為に対する責任 (accountability)</u> 感動的で遊び心のある創造性をもって、自由に理解し、探究し、試みる行為に全面的な責任を請け負うことである	
<u>寛容と誠実 (generosity and genuineness)</u> 探求の精神を個人的かつ専門的に発展させることに、進んでエネルギーや時間、熱意を費やすことである。それが他者や強化された自己理解からインスピレーションや経験を受け取ることを可能にする	
<u>肯定的関心と共感 (positive regard and empathy)</u> 否定的な経験であっても、利用者を含む出来事を省察することは、尊重することである。また共感、我々の感情から離れ、他者の観点を探索することである	

けるソーシャルワーカーの姿勢を考えるうえで示唆に富んでいる。表1をみると、省察的実践では、実践や省察、そしてそこに含まれる感情や価値観を信じることを期待されている。このことは、これまで整理してきたとおり、自分という存在を真摯に受けとめることと理解できる。加えて表1からは、肯定・否定すべての経験を含めた実践や省察から自らを発展させる姿勢と、それに対する責任が不可欠であることがわかる。

こうしたことから、省察的実践における価値要素の特徴は、以下3点からまとめられる。

- ① いまこの瞬間の行為や性質など、自分自身の全体像を受けとめ、認識すること
- ② 自らの感情を理解すること
- ③ 実践や省察、専門職としての発展に対する信頼と責任、開かれた姿勢をもつこと

## (2) 知識

すでに述べてきたとおり、Schönの技術的合理性モデルの批判の土台には、技術的合理性モデルの採用する知識が、実験的な手続きによって明らかにされた厳密な専門的知識 (professional knowledge) のみであったことへの警鐘がある。具体的に、技術的合理性では、①確立した科学的専門分野と関連づけられた確実性をもたらすこと、②長期間の訓練が正当化されるほど十分学問的であること、③他の職業と区別できること、という特徴 (Eraut1994) を有する知識基盤に限定していた。それは科学的に一般化され、普遍化された知識のことで、本稿では「形式知」と呼称しておきたい。Schön (1983) は、この形式知に該当する専門的知識が、専門職といわれるだけの要件を満たしているのか、そして、それがそのまま社会のニーズや問題に適用できるのか、という疑問を提示したのである。

そして、形式知のみに傾倒することへの懐疑から、省察的実践では、異なる知識の源泉に着目するようになった。たとえば Harrisons ら (2007) によると、省察的実践では、実践者の直面したもの

を固有のものと捉え、包括的な知識に基づいて理解することが求められる。そしてその知識には、伝統的な理論や研究によるエビデンスといった「ハード」の知識だけでなく、実践知や個人的経験、直観によって成り立つ「ソフト」の知識も包含される (Harrisons ら2007:44)。この「ソフト」の知識とは、Schön が重視した「わざ (artistry)」に含まれると考えられる。そしてそれは、形式知のように明確には規定できないものの、ソーシャルワーク実践において、その存在の重要性が認識されてきた知識である。たとえば Polanyi (=2003) によって提唱された「暗黙知 (tacit knowledge)」も、「ソフト」の知識として理解できるだろう。彼は、人は言葉にできるより多くのことを知っていると、系統的に説明されない知識を暗黙知と呼称したのである。

この種の知識は、技術的合理性モデルが知識を実践者から独立した存在として発展させてきたことに対して、実践者や経験と深くかかわるものとして取りあげられたのが特徴である。本稿では、ソフトの知識や暗黙知のように、経験をとおして獲得し、実践者の実践行為にあらわれる、明示されていない知識を総称して「実践知」としておきたい。

なお Schön の技術的合理性モデルに対する批判は、理論や実践モデルに含まれる形式知の存在の否定ではないことに注意しておきたい。つまり Schön の技術的合理性モデル批判は、「理論・技術そのものに対する批判」ではなく、「状況によらず、理論・技術の厳密な適用を暗黙的・反復的におこなう使用理論に対する批判」なのである (三品2012:85)。また、Taylor らも、「形式知がすべてのことに答えを提供する限界を認め、ソーシャルワークの意思決定にみられる道徳的な特徴や議論の余地を認識するのであれば、エビデンスに特徴づけられる実践は好ましいものである」 (Taylor ら2006:495) と述べている。こうした指摘をふまえると、省察的実践では、形式知の意義や限界を認めつつ、ソーシャルワーカーが形式知をいかに



活用するかが問われている。

そして、省察的实践の知識に対する認識論は、形式知と実践知の相互作用に着目し、両者を統合しようとする点にも特徴がある。Ruch (2005) は、技術的合理的知識（形式知：筆者注）と実践的道徳的知識（実践知：筆者注）の相互作用が、異なる知識の潜在能力を最大限にすると述べ、省察的实践家が両者の統合に寄与するとしている。この相互作用は、Eraut (1994) が提示した知識の解釈的活用の考え方から解説できるだろう。Eraut によると、知識の解釈的活用とは、状況の理解や専門的判断を導くために、状況に応じて理論的知識を解釈的に活用することで、そこでは実践の知恵（practical wisdom）が機能しているといわれる。この知識の解釈的活用の考え方からは、形式知が実践で効力を発揮するうえで、実践知が重要な役割を果たしていると理解できる。そしてこれが、形式知と実践知の相互作用に該当すると考えられるのである。

さらに省察的实践では、実践や行為のなかに含まれる知の生成（knowing-in-action）や知識の創造を重視する。たとえば空閑は、「『わざ』を言語化していくことこそ、ソーシャルワーカーを支える『知』の形成に求められる営みである」（空閑2012：10）と述べ、省察的实践のなかで、実践知の言語化を通じて知識を創造する意義を強調している。また、Fook (2007) によると、専門的知識は不確実性に富んだ状況のなかで文脈化（contextuality）されるもので、そこでは文脈に関連づけながら知識や理論が創造される。このように省察的实践では、形式的な理論が実践場面の外部から教えられるような「トップダウン」ではなく、具体的な実践経験から得られる「ボトムアップ」により獲得することが重要と捉えているのである（Ruch2000：101）。

以上をふまえて、省察的实践における知識の特徴は、次の3点にまとめられる。

- ① 形式知と実践知の双方を重視すること
- ② 形式知と実践知は相互作用しながら実践で

の効力を高めていくこと

- ③ 実践や経験に含まれている実践知から、知識の創造を行うこと

### 3. 方策・方法に関する省察的实践の理論の特徴

#### （1）方策

省察的实践におけるシステムへの視座に関して、近年では、実践や出来事そのものを振り返るだけでなく、より広い視野でそれらを捉える重要性が指摘されるようになってきた（Taylor ら2006；Bradbury2010；Gardner2014）。具体的には、批判的省察（critical reflection）や再帰性（reflexivity）といった特徴で示されるものである。そこで、その内容を整理し、システムに対する視座や取り組みをまとめていきたい。

まず批判的省察とは、既存のシステムのなかでより効果的あるいは生産的に機能する方法に焦点を当てるのではなく、システムそのものの基盤や原則へ疑問を投げかけ、その道徳性を評価し、代替案を検討することである（Brookfield2009：297）。またFook (2010：40) は、根深い思い込みや前提を掘り起こすこととパワーに焦点化することが、批判的省察の2つの主要な考え方で、それゆえ変革的（transformative）であるとした。これらの説明からわかるように、批判的省察は、ソーシャルワーカーや利用者を取り巻くシステムに目を向け、そこで作用している力関係やシステムに内在する問題点を明らかにする。そして、それらを変革していくことを課題とするのである。

ソーシャルワーク実践に当てはめると、国が策定・施行する社会福祉の制度・政策や、地方公共団体によって実施されるサービス、それを展開する実践機関など、実践の基盤となるシステムが、利用者システムや実践に与える影響を批判的に検討することといえる。また、利用者システムの生活を抑制するパワーの存在を認識し、そこで生じているアンバランスな力関係を改善していくことも、批判的省察の重要な役割と考えられる。

またGardner (2014) は、批判的省察を行うた



めの指針を、6点から整理している(表2<sup>2)</sup>参照)。ここからは、批判的省察の姿勢として、自分の考え方に固執することなく、他者の認識や方法に対してオープンになり、対立や相違を受けとめることが重要と理解できる。そしてそれは、ソーシャルワーク実践を効果的に展開するうえで、必須の姿勢と考えられる。なぜなら、利用者の複雑な生活問題に対応するソーシャルワークでは、他職種と連携しつつ、チームで支援を展開するからである。こうした連携では、コミュニケーションを通じて互いに影響しあい、そこから変化が生じるため、変容を受け入れることが必要とされる(野中ら2014)。それゆえ、チームで連携して支援するためには、他者の意見や見解を受けとめ、必要に応じて自らを変容させるオープンさや創造性といった批判的省察の姿勢が不可欠といえる。

同時に、批判的省察で他者の意見を受け入れる姿勢は、利用者の声に耳を傾けることにも通ずるだろう。利用者との参加と協働はソーシャルワーク実践に不可欠な側面で、基本原理といえるものである。そのなかで、利用者の語りや認識を尊重し、自分の考えとの違いを積極的に受けとめ、そこから学ぶ姿勢が、批判的省察によって培われるのであれば、その意義は大きい。

このように、他者や取り巻くシステムとの相互関係のなかで他者の認識や意見に目を向けるために、Brookfieldは、物事を理解する際の4つの批判的な視点を提示している。それは、①自伝的に省察する実践者、②学生や利用者、患者、③同僚、④理論的で哲学的な研究や専門的理論の4点であ

る(Bolton2014:46)。つまり、自身を客観的に見つめるとともに、専門職としての他者の理解や利用者の視点からの考えが、批判的な視点での省察を特徴づけると考えられる。

次に、再帰性(reflexivity)とは、自身の態度や使用理論、価値、仮説、偏見、慣習的な動作を問うための戦略や、他者とののかかわりのなかでの私たちの複雑な役割を理解するための戦略を見出すこととされる(Bolton2014:8)。再帰性で特に重視されるのは、自らの方法を唯一のものをみなさず、他者との相互関連をとおして自分自身の基盤を掘り下げ、疑問視することである。そのため、再帰性は、「各自の立ち位置を鋭く問い直すこと」(隅広2010:53)を強調する。また、自らの立ち位置を問い直すことは、社会から受ける影響だけでなく、実践者自身が他者に与える影響のふり返りも包含すると考えられる。このことは、Brownら(2005)が、他者に対する自己の影響への気づきが省察的実践の鍵であると指摘していることから理解できるだろう。

こうしてみると、批判的省察と再帰性は、どちらも実践を取り巻く環境との相互関係を意識するものであるが、批判的省察は、特に外部の影響に目を向け、変革する姿勢に重きを置いている。それに対して再帰性は、ソーシャルワーカーが、自らの内へのまなざしと変革の姿勢をもつことを重視しているといえる。そして、これまでの検討をふまえると、ソーシャルワーク実践の方策要素に関する省察的実践の特徴は、以下3点にまとめられる。

表2 批判的省察の指針

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>① 本当に重要なことを積極的に想起し、それに取り組むこと</li> <li>② 違いを認識し、理解すること(自分の方法を唯一の正しい方法と捉えず、違いを積極的に受け入れること)</li> <li>③ オープンさと創造性(過去の経験から過度に影響を受けるよりも、新鮮さをもち、取り組む準備をしておくこと)</li> <li>④ 創造的緊張のなかで対立するものを受けとめること(必ずしも一貫性のないものの可能性を認める姿勢)</li> <li>⑤ 違いを尊重するとともに、つながりを探し求めること</li> <li>⑥ 進んで経験から学ぶこと(特定の経験の意味を積極的に探し求める準備ができていること)</li> <li>⑦ 文脈と歴史、パワーの影響を関連づけること(広範な社会的状況や歴史の影響を理解し、考慮すること)</li> </ul> |
|--|

- ① 制度・政策やサービス, 実践機関など, メゾ・マクロシステムへの批判的視点と変革の姿勢をもつこと
- ② 他職種や利用者など他者の認識や考えに耳を傾け, 受けとめること
- ③ ソーシャルワーカー自身や自らの基盤, 利用者への影響を問い直すこと

## (2) 方法

Thompson ら (2018) によると, 技術的合理性モデルや伝統的アプローチにおいて, 理論と実践の関係は, 理論的な知識を実践に適用するという一方通行の道筋で描かれ, 実践に先立って理論が存在していた. それに対して省察的实践は, どちらか一方のみを重視するのではなく, 理論と実践の双方向性を重視する. それは, 実践者が実践に埋め込まれた知識を描くことで実践を理論化することと, 採用した理論と実践を関連づけることで理論的に実践することである (Ruch2005: 116). 特に後者においては, 知識の解釈的活用で説明したように, 実践知を活用しながら理論的な実践が展開されると考えられる. また前者について, Thompson ら (2018) は, 多様な知識を活用して実践を理論化する意義を説き, それが省察的实践に適するとした.

実践の理論化に関しては, わが国でも岡本が, 「ソーシャルワークの実践活動の系統的, 体系的情報の集積を持続的に実施し, その中から共通する所見や経験法則を抽出していくような, いわゆる帰納法的な研究と実践を展開していく必要がある」(岡本ら2010: 14) として, 実践の科学化の重要性を指摘している. 省察的实践では, こうした帰納的アプローチを個々の実践のなかで展開することを重視するのである.

このように, 省察的实践は理論と実践を統合するアプローチと理解できるが, 同時に, 過去・現在・未来の実践を包括するプロセスでもある. この時系列をふまえた考え方を, 省察的实践の提唱者である Schön の理論を中心にみていきたい.

Schön は, 省察的实践の特徴を, 「行為のなかの省察」と「行為についての省察」の2側面から示した. このうち「行為のなかの省察」は, 形式知と実践知の相互作用や知識の解釈的活用を行いながら実践することで, 実践が行われている「いま」に焦点化している. 他方, 「行為についての省察」は, いわゆるふり返りのことであり, 「実践後にふり返ることで, 実践の最中には意識しなかった視点や解決方法, 実践における自分自身の傾向などに気づき, それらの気づきを次の実践に活かす」(日和2015: 90) ことである. そのため, 「行為についての省察」は, すでに終わった実践, すなわち「過去」に焦点を当てているといえる.

さらに, 日和の説明からは, 「行為についての省察」が将来の実践に活かすために実施されていることがわかる. この点について Schön (1983: 140) は, 省察的实践を特徴づける「わざ」とは, 未知の状況にもちこまれるレパトリーの幅と多様さであると説明している. つまり, 省察的实践には, 未来の実践に活用できるスキルや実践知の保持が不可欠と理解できる. そして, 「行為についての省察」は, こうしたレパトリーの積みあげを可能にすると考えられるのである. その意味で省察的实践は, 「未来」を志向したプロセスでもあるといえる.

近年の省察的实践の研究においても, 時系列に着目した省察への言及がみられる. たとえば Thompson ら (2018: 11) は「行為についての省察」と「行為のなかの省察」に加えて, 「行為のための省察 (reflection-for-action)」という概念を提示し, 未来に直面するであろうことを前もって思考することと説明している. その他にも Seidel らは, 省察的学習者が過去 (backward), 内部 (inward), 外部 (outward), 将来 (forward) に目を向ける必要性と, 将来への着目が省察のゴールであることに言及している (Bruce2013: 44). つまり, 省察プロセスから生じた新たな観点や認識が, 思考や行為の転換に活かされることを重視するのである.

一方で、過去の出来事について思考するという省察の当初の概念からすると、計画 (forethought) も含めるのであれば、省察の辞書的意味を広げるか、新たな言葉として「foreflection」を創り出すことが必要との指摘もある (Pawar ら2015: 38)。こうした指摘を理解しつつも、本研究では、省察の実践がソーシャルワーカーの発展を目的としたアプローチであることから、未来志向の考え方も含むものと捉えていきたい。

以上のことから、省察的実践の方法要素の特徴は、次の2点に整理できる。

- ① 理論的な実践と実践の理論化の双方向のアプローチを可能にすること
- ② 過去から学び、現在・未来へと活かす、過去・現在・未来を包括したプロセスであること

#### IV. 省察的実践における実践モデル構築への試案

##### 1. 省察的実践の理論的特性

ソーシャルワーク実践の価値・知識・方策・方法という4大構成要素の枠組みからは、理論と実践、知識に対する認識や姿勢、ソーシャルワーカーの外的世界と内的世界へのまなざしと取り組みが整理できた。そこで、整理した内容からみえてきた省察的実践の理論的特性を、図2のとおりまとめてみた。

若干解説を加えると、4大構成要素に対応する省察的実践の特徴は、すでに説明したとおりである。加えて図2では、各要素間の関係性も示して

いる。それは、価値要素と知識要素が主にソーシャルワーカーの内的世界を特徴づけるのに対して、方策要素と方法要素がソーシャルワーカーを取り巻く時間的・空間的側面への視野や展開を示していることである。

具体的に、価値要素は省察的実践に含まれる感情・態度といった情緒的領域をあらわし、知識要素は、ソーシャルワーカーの内に存在する実践知の活用と、それを知識の創造によって外的世界へと導こうとする知的領域の活動に関連する。

それに対して方策要素は、ソーシャルワーカーと環境の相互作用への意識や、内的・外的環境に対する姿勢や取り組みといった、システム的な理解と行動を捉えている。そして方法要素では、理論と実践を統合しながら、過去・現在・未来という時間的流れのなかで、省察的実践家としての発展を目指すプロセスを示している。このことは、時系列の変容を重視するソーシャルワークの生態学的側面に視野を広げることを可能にするだろう。つまり、方策・方法要素は、環境や内面と相互作用する空間的側面と、時間の経過のなかでソーシャルワーカー自身が変容する時間的側面への意識化を促すものと理解できる。

また図2では、価値要素と方策要素、知識要素と方法要素の関連も示している。それは、価値要素と方策要素がソーシャルワーカーの内的世界や外的環境への視座や姿勢に関連する特徴を中心とする一方で、知識要素と方法要素が、内的あるいは時間・空間的な活動や展開をあらわしているこ

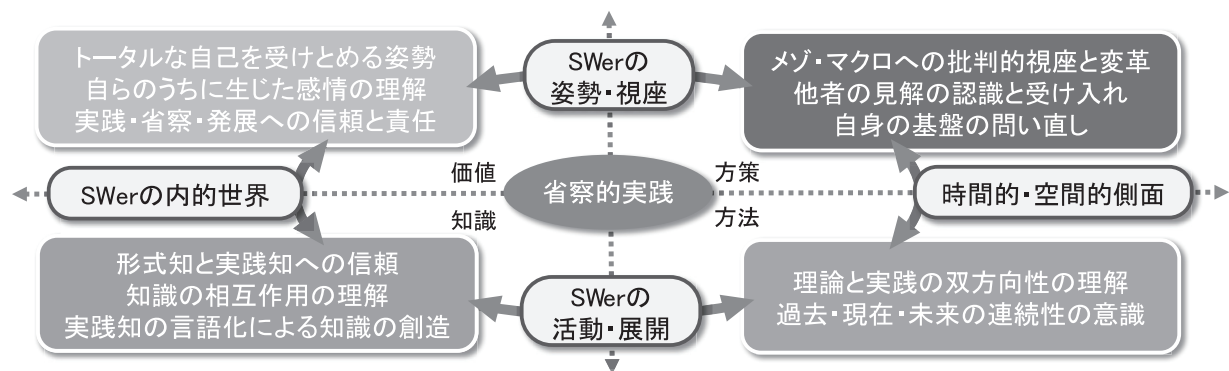


図2 省察的実践の理論的特性

とである。

こうした各要素に関する特徴や要素間の関係をふまえると、省察的実践の実践モデルの構築では、ソーシャルワーカーの視座や姿勢から、具体的活動と時間的な流れを有する展開までを含めた検討が必要と考えられる。また、ソーシャルワーカーと環境との相互作用とともに、ソーシャルワーカー自身の内面との相互作用への意識も重視されるのである。

## 2. 省察的実践の実践モデル構築への試案

最後に、省察的実践の実践モデルの構築に向けた試案を図示し、実践モデル構築への基盤となる考え方を示しておきたい。なお本図は、まだイメージ段階であるため、今後精緻化する必要があると考えている。

図3では、省察的実践の実践モデルが、理論と実践の統合化に貢献することと、過去・現在・未来を包括したモデルであることを中心に描いている。まず、理論と実践という軸では、行為のなかの省察が展開されることで、省察的実践家であるソーシャルワーカーを介して理論と実践の統合が目指される。そこでは、形式知が理論的な実践の基盤になるとともに、実践知が、形式知の解釈的活用を可能にし、創造性に富んだ実践に効力を発

揮する。

またソーシャルワーカーは、実践しているまさにその瞬間の自分の行為や、行為を導き出した自分自身へのまなざしをもつことが求められる。そして、批判的な視点でそれを掘り下げ、自身を支配している前提や基盤（たとえばソーシャルワークの理論）を問い直す姿勢が必要と考えられる。さらに、制度・政策や実践機関といったソーシャルワーク実践を取り巻くシステムのもつパワーや利用者への影響にも目を向け、変革的な立場で実践に取り組むことも、省察的実践に重要となろう。

次に、過去・現在・未来という軸については、知識の位置づけと、そこに介在する「行為についての省察」の役割を描いた。若干説明するならば、現在の実践に、学んできた形式知や過去の経験から培われた実践知が機能することは、すでに述べてきた。その実践経験は、「行為についての省察」とおして、そこに含まれる実践知を形式知に転換すること、すなわち知識の創造へとつながっていく。それが、「行為についての省察」による実践と理論をつなぐ役割と考えられる。また、実践経験の積み重ねから、新たな実践知がソーシャルワーカーのなかに形成されていく。このように、知識の創造による新たな形式知と、経験などから生み出された新たな実践知は、未来の実践に活か

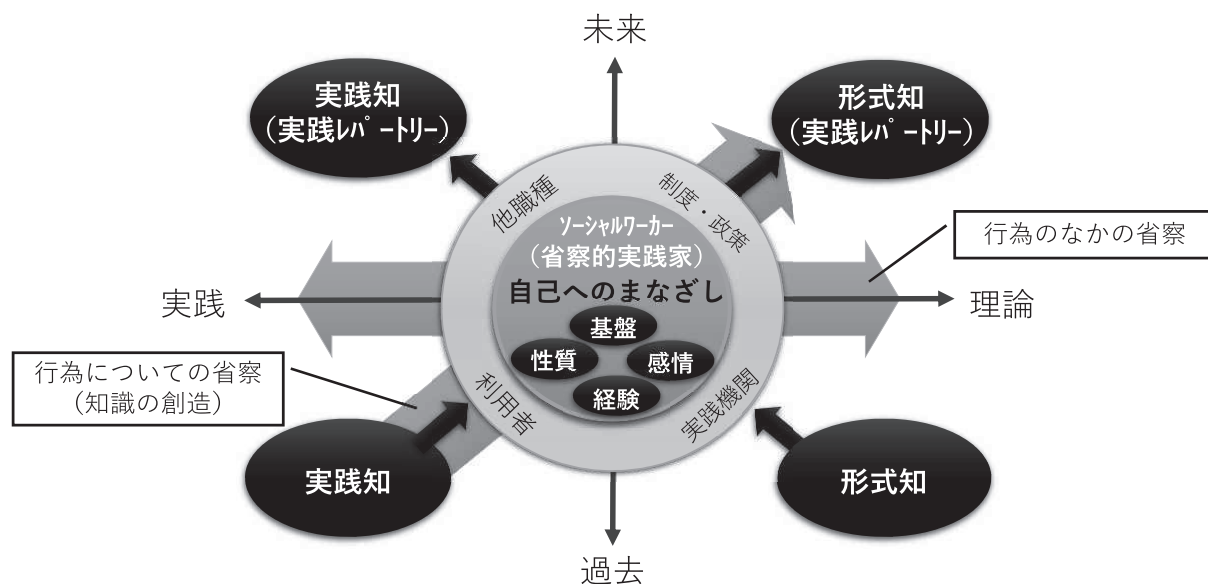


図3 省察的実践の実践モデル構築への試案図



されるレパートリーとなるのである。すでに説明してきたように、Schön は、省察的実践を特徴づける「わざ」とは、未知の状況にもちこまれるレパートリーの幅と多様さであると主張した。その意味で、図3の実践モデル構築に向けた試案図で示す過去・現在・未来の連続性は、Schön が注目した「わざ」の意味や生成プロセスを解説するものにもなっている。

### 3. 今後の研究課題

省察的実践が直面する理論化の課題のなかで、客観的に共有できる実践モデルの構築を目指し、本稿では、基礎研究として、先行研究から省察的実践の理論的特性を整理してきた。これらの内容を、方法へと具体化していくことが、実践モデル構築への大きな課題と考えている。芝野は実践モデルについて、「絞り込んだ対象者や対象問題に対する社会福祉実践の理論的背景と意義を説明し、ある程度具体的な実践方法を解説したもの」（芝野2002:41）と説明している。そのため今後は、省察的実践の視座や過程、展開の具体的内容を探究することで、実践モデルの構築へと進めていきたい。

また、省察的実践の研究が抱える問題に関して Ixer (2016) は、ほとんど実証研究が行われていないことを指摘している。それは、理論化を困難にしていることとも関連するであろう。そのため、実証研究を通じた実践モデルの構築は、大きな課題であると同時に、不可欠と考えている。さらに、ソーシャルワーカーによる省察的実践を促進するには、実践の視座や展開を含めた省察ツールの開発も重要な課題と考えている。この点に関しては、これまでソーシャルワークの理論と実践の統合化を目指して、コンピュータ支援ツールの開発が進められてきた（太田ら2017）。本研究においても、こうしたツール開発も視野に入れながら、実践現場で活用可能な省察的実践の実践モデルを探究していきたい。

## V. おわりに

本稿では、ソーシャルワーク実践の4大構成要素に着目することで、実践モデルの基盤となる特徴を整理してきた。また、実践モデルに関する試案を図示することで、省察的実践が目指す方向性を示すことができたと考えている。しかしこれらは、まだ精査が必要であるうえに、実践に結実させていくことが本研究の最大の目的である。そのため今後は、理論研究を積みあげるとともに、実証研究の実施も視野に入れながら、実践モデルの構築を模索していきたい。

本研究は、JSPS 科研費18K12968の助成を受けたものである。

### 注：

- 1) 本表は、Bolton (2014: 23-24) をもとに、筆者が邦訳し作成した。
- 2) 本表は、Gardner (2014: 26-32) をもとに、筆者が邦訳し作成した。

### 文献：

- Bolton, G. (2014) *Reflective Practice: Writing and Professional Development*, SAGE.
- Brookfield, S. (2009) "The concept of critical reflection: promises and contradictions" *European Journal of Social Work*, 12 (3), 293-304.
- Brown, K., Fenge, L. & Young, N. (2005) "Researching Reflective Practice: An Example from Post-Qualifying Social Work Education" *Research in Post-Compulsory Education*, 10 (3), 389-402.
- Bruce, L. (2013) *Reflective Practice for Social Workers*, Open University Press.
- Eraut, M. (1994) *Development Professional Knowledge and Competence*, Routledge Falmer.
- Fook, J. (2007) "Uncertainty - The defining characteristic of social work?" Lymbery, M. & Postle, K. ed., *Social Work: A Companion to*

- Learning*, SAGE, 30-39.
- Fook, J. (2010) "Beyond reflective practice: Reworking the 'critical' in critical reflection" Bradbury, H., Frost, N., Kilminster, S. & Zukas, M., *Beyond Reflective Practice: New Approaches to Professional Lifelong Learning*, Routledge, 35-51.
- Fook, J. (2016) *Social Work: A Critical Approach to Practice*, SAGE.
- Gardner, F. (2014) *Being Critically Reflective*, Palgrave Macmillan.
- 平塚良子 (2009) 「ソーシャルワークの自成理論構築のための省察」『大分大学大学院福祉社会科学部研究科 紀要』11, 13-29.
- 日和恭世 (2015) 「ソーシャルワークにおける reflection (省察) の概念に関する一考察」『別府大学紀要』56, 87-97.
- Ixer, G. (2016) "The concept of reflection: is it skill based or values?", *Social Work Education*, 35 (7), 809-824.
- Johnson, L. C. & Yanca, S. J. (2010) *Social Work Practice: A Generalist Approach*, Allyn & Bacon.
- Harrison, K. & Ruch, G. (2007) "Social work and the use of self on becoming and being a social worker", Lymbery, M. & Postle, K. ed., *Social Work: A Companion to Learning*, SAGE, 40-50.
- Knott, C. & Scragg, T. (2013) *Reflective Practice in Social Work*, SAGE.
- 小山隆 (2016) 「第4章 ソーシャルワークの理論と実践の関係再構築」岡本民夫監修 平塚良子・小山隆・加藤博史編集『ソーシャルワークの理論と実践－その循環的発展を目指して』中央法規出版, 52-64.
- 空閑浩人 (2012) 「序章 ソーシャルワーカーとその実践を支える『知』の形成」空閑浩人編著『ソーシャルワーカー論－「かわり続ける専門職」のアイデンティティ－』ミネルヴァ書房, 1-16.
- 南彩子 (2007) 「ソーシャルワークにおける省察および省察学習について」『天理大学社会福祉研究室紀要』9, 3-16.
- 三品陽平 (2012) 「反省的実践家養成のための省察的実習論の再検討－行為理論セミナーの必要性」『日本教師教育学会年報』21, 83-92.
- 野中猛・野中ケアマネジメント研究会 (2014) 『多職種連携の技術－地域生活支援のための理論と実際－』中央法規.
- 太田義弘編著 (1999) 『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規出版.
- 太田義弘・中村佐織・安井理夫編著 (2017) 『高度専門職業としてのソーシャルワーク－理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館.
- 岡本民夫・平塚良子編 (2010) 『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房.
- 岡本民夫監修 平塚良子・小山隆・加藤博史編集 (2016) 『ソーシャルワークの理論と実践－その循環的発展を目指して』中央法規出版.
- Pawar, M. & Anscombe, B. (2015) *Reflective Social Work Practice*, Combridge.
- Polanyi, M. (1966) *The Tacit Dimension*, Peter Smith (=2003, 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房).
- Ruch, G. (2002) "From triangle to spiral: reflective practice in social work education, practice and research" *Social Work Education*, 21 (2), 199-216.
- Ruch, G. (2005) "Relationship-based practice and reflective practice: holistic approaches to contemporary child care social work", *Child and Family Social Work*, 10, 111-123.
- Schön, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner*, Ashgate.
- 芝野松次郎 (2002) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』有斐閣.
- 隅広静子 (2010) 「クリティカル・ソーシャルワークにおける『クリティカル』概念の整理の試み－ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・シンキングの概念確立のために－」『福井県

- 立大学論集』 34, 43-55.
- Taylor, C. & White, S. (2000) *Practising Reflexivity in Health and Welfare*, Open University Press.
- Taylor, C. & White, S. (2006) “Knowledge and Reasoning in Social Work: Education for Human Judgement” *British Journal of Social Work*, 36 ( 6 ) , 937-954.
- Thompson, S. & Thompson, N. (2018) *The Critically Reflective Practice*, Palgrave.
- Wilson, G. (2013) “Evidencing Reflective Practice in Social Work Education: Theoretical Uncertainties and Practical Challenge”, *British Journal of Social Work*, 43, 184-172.

